
悪魔でもバスガイド

キオナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔でもバスガイド

【NZコード】

N6455Y

【作者名】

キオナ

【あらすじ】

引き籠りがちで人と接するのが苦手な少年、じゅうまくらゐの降魔黒乃。

そんな彼の唯一の心の支えは人気カードゲームの萌えキャラクターであり脳内彼女であるフィンディとのラブラブ生活を妄想する事だった。

いつも通り自宅で一人彼が部屋で妄想をしていると玄関のチャイムが鳴る。

人と接したくない彼は当然無視するが、次第にチャイムの鳴るペースが早くなりドアノブが何回も回される。

それでも彼が無視していると、無理矢理玄関のドアが破壊され誰かが入つて来た。

黒乃是怯えて布団の中に隠れフィンディに助けてを求める。

遂に黒乃の部屋の扉が開き、誰かが黒乃の布団を剥ぎ取った。

黒乃が恐る恐る侵入者の正体を確認すると、そこにいたのは実在しない筈のフィンディが笑顔で立っていた。

フィンディが語るには黒乃を地獄のバスツアーに参加させる為に迎えに来たと言う。

「フィンディはやつぱりツインテールの方が似合つてゐるよ?あ、でも君ならどんな髪型でも可愛いよ?本当だつて。」

少女のイラストが描かれた厚紙と楽しそうに会話している少年の名前は降魔黒乃。

彼はもう半年以上学校には行つておらず、人気カードゲームのキャラクターと愛し愛される妄想をしながら毎日を送つてゐる。

彼は元々現実世界の女子も好きになれる普通の男の子だったのだが、好きだった女子が転校してしまい、それならばと何処へも行つたりしない2次元の女の子を愛する事に決めた。

彼が不登校になってしまったのは特に苛めや嫌がらせがつたからでは無く、単純に脳内嫁との生活に嵌つて抜け出せなくなつてしまつたからである。

因みに彼がフィンディと呼ぶのは茶髪でツインテールの女の子がバスガイドのコスプレをしているカードで、本来このカードの名前は“悪魔でもバスガイド”だ。

フィンディとは英語で悪魔のよつた人を意味する“Friend”を元にして彼が名付けた名前で、この名前を考えるのに約1日も掛けた。

それから30分程経過した時だつただろうか、彼がフィンディに一方的な会話をしていると、自宅のチャイムが突然鳴り響いた。

(1 - 2)

「誰だらうこんな時間に？ねえフインティもそり思つよね？」

黒乃是普段から人と接するのは苦手なので家の電話やチャイムが鳴つても絶対に出る事は無い。

いつもは彼の母親が対応しているのだが今田は映画館へ外出中で不在だった。

母親が不在な事を知っていても勿論彼は無視に徹する。

彼は普通の高校生なら学校へ行っている時間帯なのにも関わらず自分が家にいるのは可笑しいと思われるのではないかと不安を抱いており、同時に人前で上手く会話出来ないのでないかという不安も抱いている。

訪問者は誰も出ない事に対して腹を立てているのかチャイムを押す間隔が速くなりドアノブを激しく動かして耳障りな音を立て始めた。しかしそれでも無視をしてフインティとの妄想に浸つていると訪問者は諦めたのか急に降魔家は静まり帰るが、その後玄関のドアが吹き飛ばされ誰かが笑い声を挙げながら家に侵入した。

侵入者の笑い声は女性であり、その不気味な笑い声と共に足音が黒乃の部屋へと近付いて来る。

黒乃是今まで味わった事の無い恐怖感に支配され、布団に包まってフインティに助けを求めた。

遂に侵入者は黒乃の部屋へ辿り着き、扉を開けて小刻みに揺れる布団を見つけると突然毛布を掴み投げ捨てた。

毛布を剥ぎ取られても尚、黒乃是目を閉じていたが數十分経つても侵入者からのコンタクトは無く聞こえて来たのはため息の様な音だけだった。

彼は何もされない事を逆に不気味に感じたが、このまま寝たふりをしていても解決がしないのは分かつていたので勇気を振り絞りゆつくりと重い目蓋を開いた。

暫らく目を閉じていた所為で震んだ視界に映っているのは彼が大切にしているフインディのカードを怪訝な表情で持っている少女だった。

自分の目に映る少女の姿を見て驚愕した彼は何度も確かめる様に目を擦つて確認した後、無意識に一言呟く。

「本物の… フインディ…！？」

その言葉を聞いた少女は満足気に頷いて頬を赤らめた。

彼の言つた通り、まるで最新の3D技術で投影されたのではないかと疑いたくなってしまう。一次元の架空のキャラクターフインディが椅子に座つていた。

彼女は骸骨の意匠が施された青いバスガイドの制服を着たやや赤みがかった茶髪のツインテールに大きな真紅の瞳…と明らかに現実世界の人間ではない風貌だった。

この時黒乃の中には恐怖心は既に消し飛んでおり、確かにそこに存在しているフインディを色々な角度から疑望した後、投げ捨てられていた毛布を拾つて布団の元へ行き再び包まつて眠つた。

フインディは再び布団に包まつた黒乃を見るなり椅子からすくっと立ち上がり、今度は彼ごと毛布を掴んで投げ飛ばした。

投げ飛ばされた黒乃是部屋の窓ガラスを割つて突き抜け、ベランダに転がつた。

ベランダに飛ばされていた彼は暫らくの沈黙の後、毛布を被りながら地を這う様に自分の布団のある場所に戻ろうとしたが途中で力尽き気絶してしまつた。

気絶してから約3時間後、黒乃是目を覚ました。ふと窓の外を眺めると外は真つ暗になつており、窓ガラスも修復されていた。

やはり夢だつたのかと彼は嬉しいのか悲しいのか判別し難い気持ちを抱きつつ左手を支えにして起きあがろうとした時、何か手に変な感触の物が当たつている事に気付いた。

まさかと思い彼が恐る恐る左を見るとフインディが恥ずかしそうな表情をしながら隣で横になつていた。

「キヤハ？ 黒乃さんつて意外と大胆ですね？」

「ほ、本物だ…本物のフインディ…それともこれは夢の中の夢…？」

未だに黒乃是フインディが実体化している事を信じられず、彼女の頬を摘まんで伸ばしたり髪の毛の匂いを嗅いだりしたが最終的にはどう考えても夢や幻では無いという結論を出した。

彼は突然の来訪者に対してどう対応して良いか分からなかつたので彼女を座布団の上に座らせてお茶と菓子を目の前に出した。

しかしふインディはそれに手を付けず、首を傾げて黒乃をじっと見つめている。

彼は気まずくなり一旦部屋を出て深呼吸をしてから戻るがやはりフインディは動かず固まつたままだつた。

無論、彼女と話をしてみたいという気持ちは黒乃にはあるのだが普段カードにしか語りかけていない重度の「ミコニケーション障害の少年にとつては高いハードルだつた。

それでも彼は夢にまで見たフインディがこの現実世界に現れるシチュエーションに胸を躍らせており、今直ぐにでも彼女を抱き締めたい気分だつた。

「ねえ黒乃さん何で黙つてるんですかあ？いつもは可愛いよーとか大好きだよーとかフインディちゃんマジ小悪魔ーとか言つてくれるのにい…」

何も言つてくれない黒乃を見かねたのか、彼女は一旦自分のカードに言われている台詞の内容をわざと強調して呴きながら彼に詰め寄つた。

黒乃はまさか普段何気なくカードに対し言つている言葉がその本人に言われるのがこんなに恥ずかしいとは知らず、顔を真つ赤にして涙目になつた。

「な、なんで…なんで知つてるんだよ…」

「キヤハ？ そんなのいつも一緒にいるからに決まつてるじゃないですかあ？ も～恥ずかしい事言わせないでくださいよ～黒乃さん～？」

動搖している黒乃に更に追い打ちをかける様に彼女はその後も彼に言われた台詞を何回も言い続けた。

だが黒乃是遂にフィンディの言葉責めに耐えられなくなつて部屋を飛び出し、玄関の扉を開けてそのまま走り去ろうとしていた彼だが、家の前に停まつていた巨大な物体にぶつかり鼻血を噴き出して倒れた。

通れる筈の道が通れないとは一体何事かと彼は起き上がって前方を確認するとそこには真黒に染まつた怪しいバスが停車していた。あまりにも可笑しい状況に黒乃が呆気に取られて口を大きく開けたまま凝視していると、背後からフィンディがバスの前まで歩いて来てフラッグを小さく左右に振つた。

「地獄のバスツアーへようこそ黒乃さん？」

「地獄の…バスツアー…！？ひええ！僕を殺す氣だなこの悪魔！人でなし！」

「キヤハ？その通りあたしは人じやなくて悪魔ですよ～？あ、でも大丈夫？大事な未来の旦那様を殺したりなんてしませんから～」

黒乃是何故こんな事になつてしまつたのか原因を探る為今まで自分とフィンディが繰り広げた妄想会話を再生すると、3日前に彼女がガイドを務めるバスツアーへ行つてみたいと言つていたのを思い出した。

甲斐性が無い彼がそんな突拍子も無い事を言つていたのは、妄想の中でなら何を言つても構わないと思えたからであり、まさか本当に行く羽目になるのなら彼は絶対に言わなかつただろう。

3 5 3 1 0
—
4 3 7 1 <

だがそんな約束よりも今フインディがとんでもない事を言つた事に彼は自分の耳を疑つた。

確かに彼女は彼に対して“未来の旦那様”と言つたからだ。黒乃是いつも妄想で彼女に僕のお嫁さんになって等のアプローチをした事はあつたが、彼女の口から自分を認める言葉が聞ける日が来るのは夢にも思わなかつただろう。

この会話だけなら彼は幸せ者なのだが、そもそも何故架空の存在であるフインディが実体化して彼を迎えて来たのかが不明なままであつた。

「ねえ、どうして君が現実にいるの？正直訳が分からなによ。」

「良い質問ですねえ黒乃さん？あなたが持つてあるカード、実はあたし つとと危にやい危にやいうつかり口を滑らせる所でした？つてな訳で内緒です、内緒？」

結局黒乃の最大の疑問は有耶無耶にされ闇に葬られた。

ただ一つ確信したのはそれを言おうとした時のフインディの顔は強張つており、聞いてはならない真実であるのは間違ひ無い。彼は前にかなり怪しいが死ぬ程愛しているフインディ、後ろには完全だが平凡な家のどちらかを選ばなくてはいけない究極の選択に迷つていたが、善く善く考えてみれば家を選んだとしても先程の様に強行手段で家を破壊され連れて行かれるのは間違ひなさそうなので彼女に言われるまま大人しくバスに乗り込む選択をした。

黒乃が乗り込んだバスの中には誰も乗車しておらず、運転手もいなかつた。

立っていても仕様が無いので彼は一番前にある右の窓側の席に座り、頬杖を突いて外の景色を眺めているとエンジンの音も掛かっていいのに勝手にバスが動き始めた。

座っている彼の隣の席にフインディが飲み物の入った紙コップを二つ持つて座り、片方を彼に渡した。

それを受け取つた彼が中身を覗くと異様に青い絵具の様な液体が入つていた。

「ちょっと…何なのこれ?どう見ても飲み物じゃ無いよねこのエイリアンの血液みたいなの。」

「キャハ?これは地獄名物の天使の生き血で~す?あ、隠し味にいんや ウフフ?」

天使の血は青いという事実にとても残念な気持ちになつた黒乃は無言で紙コップをフインディに返した。

しかし実際は最初は透明だつた炭酸飲料水に彼女が大量の惚れ薬を投入していただけで本当は天使の生き血や地球外生命体の血液でも何でも無くただの彼女の欲望の塊だつた。

その後彼は自分の飲み物の色が彼女の物と違つ事に気付き、冷めた態度でそれを指摘すると彼女は慌てて彼に普通の飲料水を渡した。

「そろそろ来ますので黒乃さん?ちゃんとシートベルト付けてくださいね?」

「来るつて何が？誰か来るの？」

› 135310 — 4371 <

フィンディが黒乃にシートベルトの着用を促すと、急にバスは道路より遙か上空に昇つて辺り一面光に覆われたかと思うとバスの前に大きな赤い門が出現し、バスはその中へ吸い込まれるかの様に入つて行つた。

黒乃是この時やつとシートベルトを着用する意味を理解したが、既に座席から落ちていたので意味は無いに等しい。

そんな彼を余所にフィンディは呑気に饅頭を食べながら謎の言語で書かれた雑誌を読んでいた。

「おい！それでも君はバスガイドかーつ！」

「キヤハ？心配しなくても黒乃さんの分のお饅頭もご用意してありますから？はい、あーん？」

「あーん…じゃないよ！僕が言いたいのは客の心配ぐらいして欲しいって話…」

彼女は黒乃をからかつて面白そうに笑つていた。

黒乃是そんな彼女の態度が気に入らなかつたのか自分の座席に戻り、隣に座つている彼女の方を見ない様に体を右に傾けて窓の外を眺めるとそこには美しい花々達が咲き誇つており、一般的な地獄のイメージとは掛け離れた光景だつた。

興味津津になつている黒乃の肩にフィンディはもたれかかりながらこの場所の説明を始める。

「右手に見えますのはムーリトクスエ高原 ここは地獄に生息している全種類の花々が集まつてま～す？左手に見えますのはリトクビ

一村 ここは人口約200人の小規模な集落ですが、シクレタイト
という特殊な鉱石の加工技術を持つた職人さんがいるのはこの村だ
けなんですよ？」

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

フインディが説明を終えるとそれまで空中を浮遊していたバスは急降下し、近くの村付近へ着地した。

勿論何も教えて貰えなかつた黒乃是またも吹き飛ばされそうになつたが、今度は彼女に息が出来ない程に抱き締められたので吹き飛ばされずに済んだ。

黒乃是行き過ぎた愛情表現をする彼女を無理矢理引き離そうとするが、知恵の輪の様に体を絡ませられて解けないので仕方無く彼女を不格好に抱えたままバスから降りた。

外に出ると2人の前に1人の若い女が跪いており、フインディは黒乃から降りて不敵な笑みを浮かべながらそれを一瞥すると女が前へ歩み出て口を開く。

「よつこそ我が村へおいでくださいました姫さ 」

「は、早く案内してくれない！？あたしあ腹空いちゃつた！」

この時黒乃是フインディが実は身分の高い者であるのを隠していた事と話を逸らした事を問い合わせたい気持ちだったが、2人の会話に口を挟む勇気が無かつた為叶わなかつた。

女に案内されるまま黒乃是フインディと村へ足を踏み入れると、待ち構えていた村人達が手を振つたり拍手をして盛大に歓迎している。

村人に見送られながら3人は更に先へ進むと赤い看板が施された小さなレストランがあり、そこまで案内すると女はフインディと黒乃にお辞儀をして去つて行つた。

フィンディに手を引つ張られて黒乃是レストランの中へ入り、彼は入つて直ぐの所にいる受付嬢を見るなり目を輝かせた。

実はその受付嬢は黒乃がフィンディ以外に溺愛している美少女キャラクターのカード“ロロタル”で、銀色の長い髪にオッドアイ…しかし基本右目に眼帯を付けているのが特徴で黒乃是彼女をろつたんと呼んでおり脳内設定では超ドレ少女である。

「やつぱりカードで見るよりも可愛いなあうつたん…ああその細い足で踏まれてみたいなあ…えへ…」

「チツ…（あたしと会つた時はあんな風に『レテレ』しなかつたのに…あんな女の何が良いですか…）」

黒乃の態度を見て不機嫌になつたフィンディは彼を足で踏み付けて痛がつてゐる隙にその場から連れ去り奥の食堂へ向かつた。テーブルに着くと豪華そうな料理が次々と運ばれて来るが、そのどれもこれもが黒乃のいた世界では見た事が無い食材が使われており不安だつたが、フィンディの様子を覗うと美味しそうに食べているので彼は戸惑いつつも口に運んだ。

「あれ？味があんまりしないなあこの料理…」

「あ、言い忘れてましたけど悪魔の味覚は人間よりも発達しているので料理も基本薄味なんですよ？だから人間の黒乃さんのお口には合わないかもです？」

その後のフィンディの話によれば悪魔と人間は髪や瞳の色を除けば

外見は何も変わらないが味覚・嗅覚・視覚に関しては悪魔の方が発達しているらしい。

> 135310 — 4371 <

味がしない所為で満腹感が得られない食事を済ませた黒乃是トイレに行くと嘘を付いてこつそり受付にいるロロタルに会いに行つた。だが彼にはロロタルに話しかける勇氣は無く、遠目に見つめているだけの宛らストーカーの雰囲気を醸し出していた為、他の客や店員から白い目で見られていたのは言うまでも無いだろう。

黒乃是諦めてテーブルに戻りうと振り返ると背後には殺氣を纏つたフィンディが優しく微笑みながら立っていたので気付いていない振りをして歩こうとしたが、抵抗虚しく彼女に椅子に縛られた揚句心臓の前にフォークを突き立てられた。

「問題ですか？さつき黒乃是誰を見ていたんですか？1・あたし 2・フィンディ 3・マジ小悪魔…さあ何番ですか？もし不正解だつたら黒乃是綺麗な赤に染まります？」

「じゃあ4番のメンヘラフィン…つてやめてやめて冗談だつて冗談！本当にちよつと刺さつてるつて！眞面目に答えるから殺さないでよ！」

「キヤハ？どうせ黒乃是妄想の中で色々な女を誑かしてて変態さんですもんね～？やっぱりお仕置きが必要みたいですか？」

「ひいい…」の悪魔あ…」

その後黒乃是椅子に縛られたまま約1時間外の田立つ場所に放置された。

彼は通りかかった人々に助けを求めたが、フィンディが村人たちに助けてはいけないと釘を刺していたので相手にされなかつた。

> .i 3 5 3 1 0
— 4 3 7 1 <

お仕置きを受けた黒乃是フインディに連れられて村の中でも一際目立つ大きな家に訪れ、彼女が家のドアをノックすると中から厳格そうな老人が顔を出して2人を家に招き入れてくれた。

老人は2人を客室に案内してソファーに座らせると、布で包まれた細長い1m程の棒の形をした物体をフインディに受け渡した。

「フインディ、この人は? それに何これ?」

「申し遅れました、私この村長を務めておりますストウス・ムーリトクス工です。そしてこれは我が村に代々受け継がれる鉱石の加工技術を応用して生成された剣です。」

「フフ、何で剣なのって顔をしてますねえ黒乃是? これをこの国の最北端にある城におられる父う 魔王様に届けられればなんとあたしと黒乃是夫婦になるのを認めて貰えるんですよ~?」

「ぶつ! 夫婦! ? そ、そりやあ嬉しいけど… 僕高校生だし働いてないし根暗だし引き籠りだし頭悪いし格好良くないし運動神経皆無だしえーっとそれからそれから とにかく僕なんかじや無理だようマイナス思考の人間である。」

どうやらフインディが黒乃是地獄に連れて来たのは観光目的では無く、彼を自らの夫にする為の作戦であった様だ。

だが妄想の中では男らしい黒乃是でも現実では自分に自信が全く無いマイナス思考の人間である。

そんな彼の態度にフインディは怒る所か惚れ惚れしており、ある意味2人の相性は抜群に良いのかも知れない。

> .i 3 5 3 1 0
— 4 3 7 1 <

村長の好意で2人は彼の家に泊まって行く事になり、黒乃がシャワーを浴びて部屋に戻るとベッドの上に妖艶な着物を着たフィンディが無防備に眠っている。

部屋はベッドが一つしか無い相部屋の為、必然的に2人で一緒に寝なければならない。

彼女を見ている内に黒乃是興奮して性的欲求が芽生え、暴走する前に何とか彼女を襲いたい衝動を抑えて部屋から飛び出しソファーで眠ろうとした。

しかし何時間経ってもフィンディの姿が頭から離れず、遂に理性を失い雄の本能に目覚めた黒乃是眠っている彼女に目を閉じて口付けをしようとするが何故があまり柔らかく無い感触だけが彼の唇に伝わって来る。

嫌な予感がした黒乃が目を開けるとフィンディが悪戯な表情をしながら人差し指で彼の唇を抑えていた。

「キャハ？ いけませんよお黒乃さん？ こーゆーのは結婚してからにしましようねえ？」

「ち、違う！ これは不可抗力で… お願いだからそんな目で見ないで…」

黒乃の欲求はフィンディによつてあつさり打ち碎かれ、悶々としながら彼女と共に一夜を過ごした。

昨晩の一件で全く眠れなかつた黒乃是気持ち良さそうに寝ているフィンディに少し腹を立てていたが、悪魔なのに天使の様な寝顔をしている彼女を見ていたらどうでも良くなってしまった。

彼が暫らく部屋でぼーっとしていると村長の妻が部屋に入つて来て

フィンディを優しく起しそうとするも中々起きない。

「朝でござる事ある?」

「んにゅ……後5分う……」

$$\begin{array}{r} 135310 \\ \hline 4371 \end{array}$$

村長の奥さんが腕に縫りをかけて作った朝食を駆走になつた黒乃とフィンディはお世話になつた2人にお礼を言つてムーリトスク工家を出た。

村を鼻歌を歌いながら機嫌に歩くフィンディの後ろでは重たい剣を抱えながら黒乃是龜も顔負けの鈍さで息を荒くして歩いていると、前方から村人達が悲鳴を上げて走つて来る。

その勢いで黒乃是激しくぶつかられて持つていた剣が遠くに飛んで行つてしまい、彼は剣が飛んで行つた方へ全力で向かつて行くと甲冑を来た女騎士がそれを拾つて去るうとしたので大声を張り上げて呼び止めた。

「す、すみません。それとつても大事な物なんです…返してくれませんか？」

「生憎私達も姫が大事なのでな。貴様の様な貧弱な若造にこの国の未来を託す事は出来ん。」

今までフィンディが優遇されていたのは実は彼女が魔王の娘であり、この国の未来を担う次期王位継承者となる黒乃を歓迎していたからである。

しかしこの女騎士と同じ思想を持つた反対派も勿論おり、反対派は魔王の命令で剣を奪いに來るので無事に剣を魔王に譲渡するのは険しい道だろう。

そんな黒乃と女の会話の一部始終を遠くから見ていたフィンディはそれまで黒乃が見た事が無い程の恐ろしい形相をして女騎士に歩み寄つた。

「ねえその剣を返して?返してられないとあたしあなた達を殺しちゃうよ?」

「しかし姫!...こんな男では...っ...分かりました。でも、うひしましょう?今から2日以内にリトク、ジー高原に咲くブリッヂ、ディリリスを摘み採つてここに持つて来てください。そうすれば剣をお返ししますよ!」。但し行くのはこの男だけ、姫は一切手伝つてはなりません。

「
八・一・三・五・三・一・〇 一・四・三・七・一・八

黒乃是何故花なのかと疑問に思つたが、女騎士が語るにはブラッティリリスには花言葉で“犠牲の上にある愛”という意味が込められており、それを異性に渡すのは黒乃のいた世界で言つプロポーズであるらしい。

ここまで話なら簡単に済みそうだが、この花は見つけ出すのが大変困難で一般的に4ヶ月は掛かると言われているので2日間で見つけるのは不可能に近く実はかなり無茶苦茶な要求である。

当然女騎士もそれを知つた上で要求したのは黒乃に王たる資質があるかを見極める為で、仮に見つけられなかつたとしても彼の努力次第では剣を返すつもりでいる。

フィンディは終始無言で黒乃をリトクビー高原へバスで送り届け、それまで彼に見せた事の無い悲しそうな表情をして帰つて行つた。

「はあ…あの人言つた通り僕なんかじゃ釣り合わないよ。それにフィンディとこの国の幸せを考えたら僕は早くこの世界から消えた方が良いのかも つて何で僕はいつもこうネガティブなんだろう！こんな性格だから何をやっても駄目なんだよ…さ、時間が勿体無いし探しに行こ。」

独り言をぼやきながら黒乃是ブラッティリリスの写つた写真と付近に生えている花々を見比べながら腰を曲げて歩き周つた。

数時間探し続けて疲れ切つた黒乃が芝生の上で横になつて眠つていると誰かが彼の顔の前に水と食べ物を置いてそそくさと去つて行つたが、それに彼が気付いたのはそれから翌日の朝である。

眩い朝日に照らされ黒乃是無駄に一日を寝て過ごしてしまつた事に気付き後悔したが、悔やんでも仕方が無いのは分かつていたので重い体を無理矢理起こして必死に探した。

> .i 3 5 3 1 0
— 4 3 7 1 <

「ひつした岩が無造作に転がり凸凹になつた地面やまるでゲームのダンジョンの世界を体感している肥沃な森などありとあらゆる場所を行ける範囲で黒乃是探索したが、似た色の花くらいしか見つけられず半ば諦めた状態だった。

しかしそんな気持ちになる度に彼の脳裏にフィンディの笑顔が過ぎり、諦める事を踏み留ませた。

俯いて歩いていた黒乃がふと前を見るとやたら細長い耳を持つた黒猫が座つてあり、彼の姿を確認すると突然鳴き声を上げながらまるで付いて来いとでも言つているかの様に駆け出して行く。

「ま、待つてよーはあはあ…速いつて…！」

黒猫はぴたりと動きを止め、黒乃の方へ振り返る。

そこは断崖絶壁の今にも崩れそうな行き止まりの道だったが、黒乃が目を細めて見ると向こうの崖に場違いな程綺麗に佇むプラッディリリスが咲いていた。

だがそれを採るには落ちたら最期の2mの距離を飛び越なければならず、そう簡単に決心が出来る行動では無い。

ましてや今までの人生で命所か何も賭けて来なかつた彼には重い選択、彼は暫らく頭を抱えて自分自身と見つめ合つた。

そしてふつきた笑みをして彼は立ち上がり、助走を付ける為に後ろへ下がる。

「あそこに生えているプラッディリリスみたいにフィンディは僕じや一生届かない高嶺の花なのかも知れない けど、君を想つて死ねるなら良いかっ！」

そう言い終えると黒乃は限界まで助走を付け向こうの崖に目掛けて高く飛んだ。

彼は無事着地しブラッディリリスを摘み取ると一気に体中の力が抜けて倒れ込む。

しかし安心したのも束の間、崖がバラバラに崩れ落ち彼は果てしなく続く暗闇の中へ吸い込まれて行つた。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

あれから何時間経過したのか、黒乃是病室らしき所で目を覚ました。ベッドにはずっと看病してくれていたのかフインディが黒乃の膝元を枕代わりにして眠つており、それを見て堪らなく彼女が愛おしく思えた彼が彼女の頭を撫でていると女騎士が入つて来るなり預かつていた剣を黒乃に渡して呴いた。

「合格です。私達はあなたと姫が作り上げるこの国を見てみたいと思いました。ですがこれからも刺客は送り込まれて来るでしょう…それでも姫をお守りすると誓えますか？」

「うーん守れるかは約束出来ないけど…愛する事は誓います　つてね。」

それを聞いた女騎士は嬉しそうに病室から出て行つた。話声やドアが開閉する音で起きたのか目を覚ましたフインディは潤んだ瞳で黒乃に抱き付く。

彼女の予想外な行動に黒乃是顔を赤くしてあたふたとしている、フインディは彼の頬を力いっぱい平手打ちした。

黒乃が驚いて彼女の顔を覗うとその瞳には大粒の涙を溜めており、溢れだしそうになる感情を必死に堪えている。

「あたしを残して勝手に死ぬとするなんて許せません…つーお仕置きです！」

「ちよつ、待つて？君のお仕置きだけは本当に勘弁だからーこれ…これあげるから許して？」

「こんな花いらないです！今からあたしの三つのお願いを全部聞いてくれたら許してあげますよぉ…？」

フィンディは黒乃に4つの要求をした。

1つ目、プリンを食べさせる。

2つ目、お姫様抱っこをさせる。

3つ目、デートさせる。

4つ目、村人達に聞こえる程大きく自分を愛していると叫ばせる。彼女曰く拒否すれば、以前よりも恐ろしいお仕置きが待っているらしい。

♪ 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 ♪

それから翌日、我が儘お姫様ことフインディの脅迫紛いのお願いでこれから面倒事をしなければならない黒乃の気分はとても憂鬱だった。

先ず一つ田のお願いのプリンだが地獄には存在せず、黒乃のいる世界に戻つて調達するか彼自身が調理するかの二択しか無い。黒乃はフインディにバスで元の世界に行きたいと伝えたが、あつさり断られて余計に催促された。

勿論料理をした事が無い黒乃にとつてはこのプリンこそが最大の壁であり、他のお願ひは羞恥心さえ我慢すれば簡単に解決するので問題は無いと彼は考えている。

「あの悪魔！食べたいなら自分で探してよ！ 愚痴つても始まらないし材料探しに行こ。そう言えばプリンって何で作るんだろう？どうしよう卵と牛乳と…砂糖ぐらいしか分かんない。」

フインディから受け取つた地獄の通貨を握り締めながら黒乃が村を練り歩いていると、何やら隣の建物から甘い匂いが漂つて来る。匂いに釣られるまま黒乃が建物に入ると一生懸命口口タルが何かを搔き混ぜており、彼の視線に気付いたのか動かしていた手を止めて目をぱちくりした。

やはり勝手に入つては拙かつたと思つた黒乃が出て行こうとするとき口口タルは彼の服の袖を掴んで捕まえた。

「お待ちくださいませ黒乃様。何かお探しでいらっしゃいますか？」

「えーっと…ろつたん じゃなくて君は何で僕の名前知ってるの

？」

「何で、でござりますか？あなた様はいつも私めを大切にしてくださいましたではありませんか？」

「と、言つ事はろつたんもフィンディと同じで僕の妄想の記憶があるんだ。でも妄想と全然性格違うよなあ…」

そう言つて黒乃是自分が妄想していた2人の性格を思い出しながら呟いた。

だがこの時の彼はロロタルの本当の性格を未だ知らない。

> 135310 — 4371 <

本人曰く、レストランの受付嬢である口口タルがここにいるのは菓子職人の親戚の手伝いをしているからだと言つ。

これは絶好のチャンスだと考えた黒乃是思い出せる範囲でプリンのイメージを口口タルに伝え、協力して貰つて作る事にした。それから思考錯誤の末に黒乃が作り出したお菓子はほぼプリンと言つた感じなのだが、人間と悪魔の味覚が違う為に自分では味見が出来ない。

そこで彼は口口タルに味見を頼んだ。

「どう? 美味しい?」

「美味しいです…！人間の皆様方はこんな美味しい物を毎日食されているのでござりますか！？」

「そんなに美味しいの！？」

口口タルは目を輝かせながら頬を抑えてそう言つた。
それを聞いた黒乃も味がしないと分かつた上で食べてみたくなつたので、一片取つて口に運んだ。

微かに味はするのだがそれは甘いと言つよりは辛く、舌がひりひりと痺れている感覚だつたので本当に美味しいのか彼は疑問を持つたが口口タルが嘘を付いている様にも気を使って美味しいと言つてゐる様にも見えなかつたのでこれで一応完成になつた。

「手伝つてくれてありがとう。今度お礼させてね？」

「お礼、でござりますか？では…目をお瞑りくださいませ黒乃様。」

「え？ ああ、うん…？」

その時だつた、鬼の形相をしたフインディが扉を蹴破つて入つて來た。

突然の大きな音で思わず目を開いた黒乃是恐怖で腰を抜かしがたがたと震えていると、ロロタルが彼を庇つ様に前へ出てフインディを睨み付ける。

黒乃是修羅場と化したこの狭い空間に漂う殺氣と威圧感を和ませようと2人の間に立つて愛想笑いを振り撒くが、2人に凶器を向けられ慌てて部屋の隅に隠れた。

> i 3 5 3 1 0 — 4 3 7 1 <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6455y/>

悪魔でもバスガイド

2011年11月24日18時56分発行